

『青森県史 民俗編 資料編 下北』

古館 光治

『青森県史 民俗編』刊行に携わられている方々は、青森県の民俗調査・研究の先端にいる方々であり、日頃より何かと教示いただいている方々でもある。その方々がまとめられた本を書評、などと大それたことができないほどの蓄えはない。一南部衆の感想・紹介というレベルでこれを読んでいただきたい。

青森県を語る時によく使われる「津軽と南部」という物言いをすれば、下北も南部になる。南部を広げると岩手県の北上川上流域から宮古・遠野・花巻まで延びるし、秋田県の鹿角も含まれてくる。これだけ広いので南部とはいっても一つでは表せない多くの色を持っている。今回の対象地域は、マサカリ半島と呼ばれる下北半島の、マサカリの柄の付け根と鉄の部分といえれば良いのだろうか。太平洋・津軽海峡・陸奥湾に囲まれ、古くからの対岸である北海道や津軽との交流、南部藩の港として日本海との交易の要所でもあった。津軽とともに日本三大美林「青森のヒバ」の一角を形成する地域なので山林資源も豊富であり、山と海の生活が積み上げられている。豊かな自然資源に包まれた重層的な生活文化を持つ地域として私は下北を見ている。先に記した「広い南部」で考えても、その南側の地域とは違う色合いを見せる地域である。南部衆として見ると、そこに自分と同じ色と別の色を見ることになる。(なお、以下で筆者が「南部」と記す場合は、この本に先行した『資料編 南部』が

対象とした地域＝筆者が暮らす地域として読んでいただきたい。)

もう一つ、私には「団塊の世代」に近い世代としての目線がある。物が足りない時代から身の周りの物を整理できぬ程溢れさせる時代までを経験している。そうした変貌の激しい時代に身を置いてきて、民俗という伝承されてきた慣習的な生活文化が、どのように変貌してきたかということに対する関心が頭をもたげる。

そんなことを考えながら以下を綴る。

青森県史は平成八年から始まり、民俗を担当する民俗部会の活動も当初から動き始めていた。青森県を南部・下北・津軽の三つの文化圏に分け、それぞれの『資料編』の刊行が企画され、当初の予定では三区域の特質に検討を加える『総論』を出す予定だったらしい。その計画にもとづき平成十三年春に『資料編 南部』が出されている。三八・上北地方、八戸から六ヶ所村・横浜町までを対象としていた。今回の刊行はそれに続くものとなる。今回の対象である下北の民俗に関して民俗部会では、津軽海峡に面したエリアの『北通り』（平成十四年）、陸奥湾に面したエリアの『西通り』（平成十五年）の調査報告書が既に出されている。この『資料編』の準備にあわせて進められたものである。

南部・下北と計画の三分の二が終わったわけだが、それでも太平洋側を過ぎただけで、まだ津軽が残っている。青森県は広いものだと改めて思う。ただ、その広い県域を総括するであろう『総論』の予定が県史のホームページには見当たらなくなっている。

全体は第Ⅰ部「民俗の諸相」、第Ⅱ部「民俗研究のあゆみ」、第Ⅲ部「民俗関連の記録資料」（以下では「諸相」「あゆみ」「記録資料」と略す）の三部構成となっている。構成自体は『南部』とも共通するし、全県としての比較の意味ではこれからの『津軽』でも踏襲されるだろう。

「諸相」は、社会構成・生業・衣食住・人生儀礼・年中行事・信仰・民俗芸能・口承文芸という民俗八分類により、下北地方の民俗の諸相の記録と整理がなされている。これに特編として「声と音」が加えられている。唱歌ごと・はやし詞や念仏、歌や祭り囃子など文字ではなく声で伝えられたものに対する民俗音楽からのアプローチである。もともと私にはそこにある楽譜が示すものを理解できる知識の持ち合わせはないが、ここで用いられた資料はこれまでの民俗資料緊急調査や県教育委員会の民俗・文化財の調査記録、県立郷土館の民俗調査、下北地方自治体による調査を主要としたものである。これまでの下北の民俗に関する記録類を網羅し、これに前記二報告書の調査結果を加えて作成されている。

「あゆみ」は、明治以降の研究史解説と年表、その研究成果の一部などで構成し、現在の研究につながる役割を紹介している。『南部』の際は中市謙三・小井川潤次郎・能田多代子など研究者にスポットを当てた形だったが、今回は資料そのものを紹介している。これに関しては解説で下北の民俗研究は初期においては南部の人によるものが多かったからとある。ここでは民俗学確立する以前の『東通村尻芳の記』や戦後の九学会連合による調査から宮本常一の論考などが構成する。

「記録資料」は、下北の民俗事象が記された資料類が集められており、菅江真澄の「まきのふゆがれ」など六編が頭注付きで掲載されたほか、

恐山関係文書や寺社縁起などで構成されている。

以上三部の構成とその内容を見ると、従来からの研究を重視していることがよく分かる。自治体史の民俗本を見ると、対象地域のそれまでの研究が反映されていないものも時に見られることがある。時代と共に変化していく民俗の性格から考えると、こうした先学の研究の足跡をたどりながら整理することはとても大事なことなのだと思う。研究というものは須らくそうなのだろうが、従来の研究との連携であり、地域の積み上げられた資料に自らの資料を積み上げることでもある。この本がめざしたのは、二十一世紀初めの下北をそれまでの研究の上に積み上げて見ることにあるのだと思う。

A4版七〇〇ページを越える本書は手に取ると大きいし重い。読むとなると重いが、調べるとなるとこの重みがかん強さに変わる。私などは地域研究の蓄えが十分ではないので、前回の『南部』をすっかり頼りにしてしまっている。

少し「諸相」の中へ入ってみる。分家にカマドが付いたり、道路をケイド・カイドと言ったりホイトが付いたり、イツコに入ったビツキ（赤子）がいたり。全体に南部の人間から見ると共通する事項は少なくない。やはり下北は南部なのだと思う。馬産地南部と同じような馬との暮らしがあるし、下北なのでつい寒立馬を想像してしまう。半島なので、漁業も旧来からの主産業であることを感じるが、できれば近年話題の「大間のマグロ」を見たかったようにも思う。行事の中では全国的にもそうだし南部もそうだが、十二月は神様のトシトリのオンパレードだったりす

る。この辺りには年の変わり目に対する重みを考えさせられる。盆踊りでは下北本場のオシマコは当然としてほかに南部定番のナニヤドヤラもあるし、手踊りでは本場を称する南部町剣吉からの伝承もあるようだ。

それでもやはり南部との違いが濃く出る部分もある。海に囲まれた下北にとって交通・交易・漁業などは重要なわけだが、庄内衆・越中衆・津軽衆と呼ばれる人たちがいたり、ナガレモノと呼ばれる移住者がいたりするのはかつての交易・交通の証なのだろう。農業の労働慣行のところで、南部に記載されていた小作がないのは下北における農業の規模とも関係するのだろうか。豊かな山林資源に取り組む林業などは、産業としての充実を感じる。奥深い森林ゆえ炭焼きも盛んだったわけで、かつては南部でも盛んで、特に昭和初期までは主要産業といえる様相を呈していたが、そうした時代も彼方になっていく。岩手県では現在も炭に力を入れているようだが、青森県はどうだろう。南部の代用食の代表はソバだが、下北はジャガイモだという。田名部祭りに代表される下北地方の山車祭りは、南部の山車祭と違って古風を感じさせる山車が見られる気がする。

最も南部との違いを印象付けられたのは信仰かもしれない。オシラサマは南部でも欠かせないところだが、章の組立てが南部の時とかなり違ってきている。地域の特徴的な信仰がみられることによるのだろう。特に各集落の集会施設としての性格が強いテラの存在には興味を覚えた。仏像も祀られる日常の地域信仰空間であり、本村の寺院に対する枝村のテラは生活と信仰の繋がりのシンボルのようにも思える。そして、やはり恐山信仰は大きい。南部でも死者の魂は「恐山に」と言っている所が

あるくらいだから、地元ならよりそうした思いは強いように思う。

能舞に代表される民俗芸能もやはり南部とはズレがあり、それぞれに個性を感じる。南部の代表えんぶりに該当するものはないが、同じように小正月の予祝行事として豊作を祈る餅つき踊りがある。南部にみられるヘンバイ・念仏踊り系は下北には見られないようだが、これらが色濃く残る岩手県の北上川系に南部・下北を並べると、大南部の連なりが見えるようにも思う。

こうした地域としての特徴とともに、やはり記録された生活と今の生活の「差」を考えさせられる。聞き取り調査はどうしても年配者を対象にせざるを得ないわけだし、当然そこで語られることは「かつて」のことになる。若者組・青年団にしても、今はこうした集団が地域の中で機能できる部分は限られる。地域の中の付き合いも変わり、物もあふれた現代では「生活用具の共用」をすることはあるだろうか。衣食住とも大きく変わった。素材も容器も、使い方も変わってしまった。今はやりの「コーデュロイ」もかつては「コール天」と呼んでいた。子供の頃我が家の食卓にもよく並んだヒエママを、我が子達は外食の「稗御飯」としてしか知らない。婚姻のところは常に「縁談」から始まるが、今は有料で紹介する職業が目立つし「嫁やり・嫁とり」の語は使われることもないのだろう。年中行事の正月準備あった「トシトリ」だが、私の子供の頃の記憶ではトシトリを普通に使っていて、学校に通うようになってから覚えたハイカラな言葉が大晦日だった。正月の「元朝参り」も同様で「初詣」はなかったような気がする。「小正月」の話しても旧暦に対する知識を持つ人が少なくなっている。古い資料に接すると今の生活が

脳裏に浮かぶ。民俗本というのはつくづく今の生活を振り返るためにあるものだと思う。地域の暮らしを振り返る材料がここにはたくさん載っている。

前回『南部編』を手にとって眺めた時に手が止まったのが、食事のカラー写真のところ。民俗の本で食事というやはり材料がどうの、調理がどうの、食器がどうのという記述で済まされることが多かったが、完成した食事をフルカラーの写真で並べられるとそれだけで顔が緩んでしまう。今回もここに六十枚のカラー写真が並んでいる。日頃調理や料理に縁遠くても写真で見せられるとつい食べてみたいという思いに駆られてしまう。記録もさることながら、やはり目で理解させるというのも大事だと思うし、ビジュアル云々の時代を考えれば妥当なものだろう。より多くの人達に利用してもらうにはビジュアル化はもっと進められるべきだろうし、進められることになるのだろうとも思う。

自治体史に関わる仕事にあるゆえ、最近は特に自治体史編纂事業の難しさを考えることが多い。「自治体の歴史を編纂する」ということは、「歴史に関する資料を収集・整理し、それを記録すること」であるとい一般的にはとらえられているだろう。そして、基本的には記録を集成した「本」に象徴されるのではないのだろうか。では「本」とは何か。私は、本は著者と読者のコミュニケーションツールであると考えている。著者から読者に対する発信であり、本を作る作業の中ではうまく伝える努力が求められるものと考えている。かつての自治体史は、主に著者側の意見、研究者の論理で進められてきたのではないかと考えている。読者から見

ると「難しい」本も少なくない。著者が素人相手の文章に慣れていないことからくる予備知識なしは入れない記述も少なくないように思う。しかし、編纂事業が税金によって進められる事業である以上、原則的には納税者に還元されなければならない性格を持つ。納税者といっても住民は様々であり、必ずしも歴史的なことに興味を持つ住民ばかりではないというより歴史に対する関心を持つ住民の方が少ないのではないかとすら思っている。そのような環境下では対象とする読者をどのような想定すればよいのだろうか。価値観の多様化している社会の中で、「住民全員に」などという抽象論では形にするための実務を進められない。効果的に進めるためにはできるだけ普及しやすすい読者層を想定しなければならない。需要の問題でもある。編纂事業が終って在庫の山が残ったという話は良く聞かすが、その一因としてこの問題も考えなければならないのだろうと思う。

この問題は、研究とは別の部分、普及の問題と考えている。普及のためには研究とは別の視点で取り組みなければならない。著者の視点だけでなく読者の視点からの工夫が求められてくる。実務的に考えてみても、例えば、原稿自体も一般読者向けとして用意しなければならなくなる、編集に時間と経費をかけなければならなくなる、など。著者と読者向きを合わせて考えなければならぬ難しさがそこにある。これからの編纂事業は、研究だけではなく普及も視野に入れて考えられなければならないと思う。(普及の問題では「営業」も考えなければならないのだろうが、ここでは触れない。)

この考え方を延長して考えると、「地域の歴史研究者と地域住民が歴

「史の本を通して向き合う」ことが編纂事業の核心なのだとも思う。いずれにしても、それを形にすることはたやすいことではない。

そういう意味で考えると、やはり自治体史の資料編・資料集というものは難しいものがある。八戸市では昭和四、五十年代に市史を発刊したことがある。通史編一卷と資料編十巻からなるが、この資料編は藩日記の記事から抜書きした解説文で綴られている。古文書の解説文というのは活字になっているとはいえ、多少の訓練を要するところがある。ゆえに「読めなかった、わからなかった」とする声を多くの人から聞いている。売上げにおいても、通史編は早い時期に売り切れたが、資料編は多く売れ残った。そこにも市民の関心の集まり方や「市史」という本のイメージが見られると思う。「解説を入れればわかる」とする意見に会うこともあるが、それ程簡単な話ではないのだと思う。

繰り返しになるが、資料編や資料集は研究者や関心の強い読者にとっては興味をそそられるものであっても、一般読者にとっては読みにくい本だと思う。しかし資料編や資料集はそれで良いのだとも思う。資料編・資料集は、普及のためではなく、研究の側に属するもの、普及のためではなく普及のためのベースになるものだと思う。それを普及のためのものとして扱おうとするから難しさが発生する。今後計画される編纂事業の中ではその辺りを十分に議論・検討してほしいものだと思う。

本書はタイトルにも銘うっているとおり資料集なわけで、普及のベースとしての資料であり、研究者とか関心の高い人を対象とする性格のものである。研究者の中からこの資料編をもとに普及に取り組む人が出てくることを期待したい。どこかの新聞で「当地検定の「下北検定」が始

まる由、との記事を見かけた記憶がある。そんな時にこの本を出題ネタ本にしてほしいと思う。そうすれば意外と注目する人が増えるかもしれない。

この次は『資料編 津軽』になるのだろうが、そこまで届いたらやはり当初プランにあったに『総論』までいつてほしいと思う。こんなにバラエティに富んだ県を総括しないまま終るのは悔いを残す。そこから更に普及のための民俗本まで延長してもらえればなお嬉しい。

(ふるだて・こうじ 八戸市立図書館市史編纂室長)